

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11275

研究課題名(和文) 認知症発症に対する懸念や恐怖をもつ中高年者を支援するシステムの構築

研究課題名(英文) Emotions associated with development of dementia in middle-aged and older adults in Japan

研究代表者

星野 純子 (Hoshino, Junko)

名古屋大学・医学系研究科(保健)・准教授

研究者番号：50369609

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、本邦の中高年者を対象に、自己の認知症発症に抱く感情について質的研究から明らかにすること、感情の有訴率や関連要因について量的研究から明らかにすることを目的とした。地域の中高年者13名の自己の認知症発症に抱く感情を表す6コアカテゴリーとして【恐怖】【懸念】【脅威】【否認】【諦め】【安心感】が明らかとなった。また、中高年者約600名を対象とした調査において、認知症を発症することを「おおいに心配している」と回答した者は約25%であり、懸念、恐怖、不安、脅威を感じている者は各10%程度であった。認知症発症に関する心配の関連要因として、心身の衰えの自覚や抑うつ感といった要因が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自身の認知症発症の脅威に対する感情的な反応と定義される "Dementia worry" (DW)に関する文献は国内で見あたらず、国外ではいくつか散見されるものの有効な支援は確立していない。本研究は、本邦の中高年者の認知症発症の脅威に関する実態を明らかにし、科学的根拠に基づいた支援を構築することを目指した研究である。本研究の結果、地域の中高年者は自己の認知症発症についてネガティブな感情を持つことが明らかとなった。また、その関連要因として、加齢に伴う心身の衰えの自覚や不定愁訴の頻度、抑うつ感といった自律神経活動の衰退と考えられる要因が明らかとなった。結果に基づいた教育プログラムの開発が求められる。

研究成果の概要(英文)：We aimed to identify the emotions experienced by middle-aged and older adults in Japan regarding them developing dementia in a qualitative study and estimated the prevalence of emotions and factors affecting them using quantitative analysis. Six core emotion categories were identified among 13 middle-aged and older adults who belong to local clubs. The emotions were "fear," "apprehension," "threat," "denial," "despair," and "relief." Among 600 middle-aged and older adult participants, approximately 25% were "very worried" about developing dementia, while 10% each were "always" or "frequently" apprehensive, fearful, anxious, or threatened. Factors associated with "worry" were awareness of physical and mental decline and depression, which suggested a decline in autonomic nervous activity.

研究分野：地域在宅看護学、老年看護学

キーワード：認知症発症 感情 恐怖 中高年者 地域

## 1. 研究開始当初の背景

本邦の認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)によると、社会全体で認知症の人を支える基盤を構築するために、認知症の人が生き生きと活動する姿を積極的に発信するなど、認知症への社会の理解を深めるための普及・啓発活動の推進が国の重点課題となっている。一方で、内閣府による認知症に関する国民の意識を把握するための「認知症に関する世論調査(2015年)」<sup>1)</sup>の結果によると、30-39歳の約半数が認知症に対する持っているイメージとして「身の回りのことができなくなり、介護施設に入ってサポートを利用することが必要になる」と回答し、70歳以上の15.1%が「認知症になると、症状が進行してゆき、何もできなくなってしまう」と回答している。高齢者に認知症に対するイメージを調査した先行研究<sup>2)</sup>においても、「悲しい」に思うと回答した者が83.2%、「怖い」は87.3%、「大切にされない」は70.3%、「恥ずかしい」は62.5%であり、多くの高齢者が認知症にネガティブな感情を抱いていることがわかる。また、近年、認知症に罹患しているという病的不安にとらわれ生活に支障をきたす「物忘れ恐怖症」や「物忘れノイローゼ」の増えていることが報告<sup>3)</sup>され、社会で認知症発症の恐怖を克服するためのさらなる活動が求められる。

国外の文献によると、2012年頃から人の認知症発症の脅威に対する感情的な反応を“Dementia Worry”（以下、DWとする）と呼び概念化している<sup>4)</sup>。DWは中年期と高齢期の人に多くみられ、懸念や心配というレベルから強迫観念や恐怖症というレベルまで様々と考えられている。英国における世論調査によると、回答者の31%は他の重大な健康障害よりも認知症を恐れていると報告しており、この数値はがんへの恐れに次いで2番目に高い数値である。55歳以上の回答者でみると、認知症を最も恐れている。一方、アメリカの調査においてアルツハイマー病の発症を懸念していると回答した者の割合は26-49%、オーストラリアの調査では約半数が認知症の発症を心配していると回答しており、このような懸念、心配は個人の心身の健康や行動に悪影響を及ぼす可能性があることから、中高年者の認知症発症に対する主観的な感情について探求する必要性が述べられている。

DWに影響を与える要因について明らかにしている研究は国外においてもまだ少ない<sup>5-6)</sup>。DWは、住民の高齢になることへの不安や健康に関する不安といった要因も組み合わさっているのではないかと考えられる。主観的に記憶力の低下を自覚していること、アルツハイマー病の家族歴を有すること、周囲に認知症者がいる（遺伝的に関連していない家族、友人、看護師など）ことはDWに影響を与えるのではないかと考えられる。といった要因が影響要因として予測されているが、はっきりとした要因は国外でも明らかになっていない。人の認知症発症の脅威に対する感情に影響を与える要因を明らかにし、素早く支援することが求められている。

## 2. 研究の目的

本研究は、本邦の中高年者に対し認知症発症の脅威に対する懸念や恐怖といった感情を支援するシステムを構築することを目的とする。具体的には、中高年者に対し、(1) 認知症と認知症発症についての感情を詳細なインタビューを通じて明らかにすること、(2) 明らかになった感情の有訴率やそれに影響を与える要因について、中高年者を対象にした質問紙調査から明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### (1) 中高年者に対する認知症と認知症発症の感情についてのインタビュー調査

対象者は、愛知県・岐阜県に在住している40歳以上の中高年者13名であった。対象の募集は愛知県と岐阜県内で行われているレクリエーション活動等に出向き、中高年者に対し研究目的、研究方法など研究の概要を説明する方法をとった。説明書を用いた口頭での説明に対し、文書による同意を得た者を対象者とした。

調査方法は、認知症についての認知と認知症発症についての感情（懸念、不安、恐怖など）、なぜそのように感じるのか、感情による健康や行動への影響について約15分程度の半構成的面接を行った。その際、対象に事前に同意を得て録音およびメモを取ることを了解求めた。

分析は、録音したインタビューを繰り返し聴取するとともに、逐語録を熟読した。そして、「自己の認知症発症に抱く感情とその理由」を抜き出し1コードとした。さらに、コードの同質性により統合しサブカテゴリ、カテゴリとした。

本研究は、研究代表者と共同研究者の所属機関において、研究倫理審査を受け、承認されてから実施した。

### (2) 認知症発症についての感情の有訴率や関連要因についての質問紙調査

対象者は、愛知県・岐阜県に在住している40歳以上の中高年者624名であった。対象者には、

愛知県と岐阜県内で行われているレクリエーション活動等の際に、研究者もしくは活動の代表者から研究説明書、質問票、返信用封筒（必要な場合のみ）を配布し、研究説明書の内容に同意が得られた者を研究対象者とした。質問票は、研究者によりその場で回収もしくは返信用封筒を用いて研究者の所属機関宛に返送してもらうことにより回収した。

調査方法は、無記名自記式の質問紙調査を行った。調査項目は、年齢、性別などの基本情報の他、認知症発症の恐怖を問う独自の質問票と妥当性等がすでに検証されている Japanese Gerotranscendence Scale Revised; JGS-R、バック抑うつ質問票 BDI-II、Japanese-language Dementia Knowledge Assessment Scale: DKAS-J を用いた。既存の尺度の使用に関しては開発者から了承を得て使用した。回収した質問票には ID 番号を記載し、質問票の内容を電子媒体に記録する時は、ID 番号とともに記録した。

分析は、まず、質問項目ごとに単純集計、相関分析を行った。その後、認知症発症についての感情（懸念、不安、恐怖など）の有無を従属変数、その他の質問項目を独立変数とした単変量解析を行い、認知症発症についての感情（懸念、不安、恐怖など）に関連する要因を明らかにした。これらの分析には、SPSS 28.0J for Windows を用いた。有意水準は 5%（両側）とした。不明回答は不記載とした。

本研究は、研究代表者と共同研究者の所属機関において、研究倫理審査を受け、承認されてから実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 中高年者に対する認知症と認知症発症の感情についてのインタビュー調査

###### ① 対象者の概要

対象者は、男性 6 名、女性 7 名の計 13 名であった。平均年齢は 72.4 歳であり、60 歳から 91 歳の範囲であった。認知症である者と接した経験のある者は 12 名（92.3%）であった。

対象は認知症という病気やその症状に関する知識として、「認知症の中核症状（同じことを何度も言う、服の着脱や料理ができなくなるなど）」、「認知症と認知症者の特徴（くも膜下出血が認知症の原因となる、認知症者は周囲への迷惑や不安、恐怖等が分からなくなるなど）」、「分からなくなることによる社会生活上の困難（徘徊により警察沙汰を起こす、常識がなくなるなど）」、「人間としての尊厳保持困難状態（家族が認知症者の存在を恥じる、目立たないように認知症者を匿うなど）」、「認知症の原因と予防法（夫婦関係悪化により認知症を発症する、規則正しい生活が認知症の進行を遅らせるなど）」について語った。

###### ② 地域に在住する中高年者が自己の認知症発症に抱く感情

###### A) 恐怖

中高年者は、がんなど自身が患う疾病と認知症発症を関連させて「基礎疾患があることによる認知症発症への恐怖」を抱く、認知機能を段階的に喪失する状況を予測したり、他の疾病と比較したりして「認知症とその症状による認知症発症への恐怖」を抱くなど、自らの現状や認知症の特徴に起因して安全が脅かされ、自己の認知症発症に恐怖を抱いていた。

###### B) 懸念

中高年者は、身近な他者に迷惑をかけることを考えて「他者への迷惑を予測した認知症発症への懸念」を抱く、他者の重荷になることを考えて「他者への負担を予測した認知症発症への懸念」を抱くなど、自らの認知症発症により日常生活に援助が必要となる状況から、自己の認知症発症に懸念を感じていた。

###### C) 脅威

中高年者は、認知症という病気を威力として、「認知症とその症状による認知症発症への怯え」や「備えを迫られるほどの認知症発症への怯え」を抱くなど、自身の心の平衡を揺さぶられ、自らの認知症発症に怯えを感じていた。

###### D) 否認

中高年者は、認知症発症について考えることから目を背け、「認知症を発症しない決意」をしたり、「認知症発症への無視」をしたりして、自らの認知症発症の可能性を認めたくないと感じていた。

###### E) 諦め

中高年者は、認知症発症に対し無力感を覚えて「認知症発症への開き直り」をする、「認知症発症への観念」を抱くなど、自らの認知症発症への諦めを感じていた。

###### F) 安心感

中高年者は、認知症の者への良質なケアを期待して、「専門職の援助による認知症発症への安心感」を感じていた。

##### (2) 中高年者に対する認知症発症についての感情の有訴率や関連要因についての質問紙調査

###### ① 対象者の概要

対象者は、愛知県に在住している者 361 名 (65.7%)、岐阜県である者 190 名 (34.3%)であった。平均年齢と標準偏差は 65.4±12.0 歳であり、40 歳以上 55 歳未満である者 130 名 (24.2%)、55 歳以上 65 歳未満である者 92 名 (17.4%)、65 歳以上 75 歳未満である者 171 名 (32.5%)、75 歳以上である者 132 名 (26.0%)であった。性別は、男性 182 名 (34.5%)、女性 344 名 (65.5%)であった。

② 認知症発症についての感情 (心配、懸念、恐怖、不安、脅威、考えない、諦め、安心) の有訴率

自分が認知症を発症することについて「おおいに心配している」と回答した者の割合は 135 名 (24.5%)であった。また、自分が認知症を発症すると考えたときの反応 (懸念、恐怖、不安、脅威、発症を考えないようにしている、諦め、安心してられる) について、「なし」、「まれに」、「時々」、「頻繁に」、「常に」から選択し、「常に」もしくは「頻繁に」と回答した者 (以下、感じている者とする) の割合を図 1 に示す。

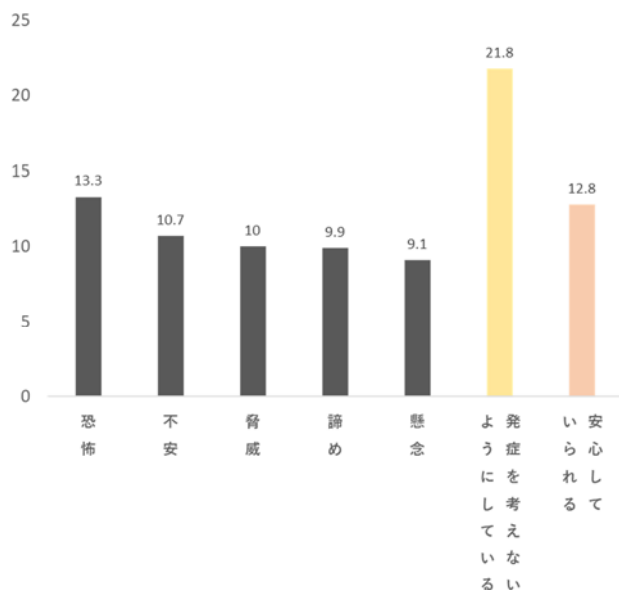


図1 自分が認知症を発症すると考えたときの反応

自己の認知症発症について、恐怖 (恐れること)を感じている者は 73 名 (13.3%)と最も多く、次に、不安 (気がかりで落ち着かないこと)を感じている者 58 名 (10.7%)、脅威 (おびやかされること)を感じている者 54 名 (10.0%)、諦め (発症について諦めの気持ちがあること)を感じている者 53 名 (9.9%)、懸念 (気にかかること)を感じている者 50 名 (9.1%)であった。自分が認知症を発症することについて考えないようにしている者は 118 名 (21.8%)であり、発症すると考えても安心してられる者は 68 名 (12.8%)であった。

これらの反応間の相関係数を表 1 に示す。すべての反応間において、統計学的に有意な関連がみられた。認知症の発症について、恐怖、不安、

脅威、懸念といったネガティブな反応間には正の関連がみられた。これらネガティブな反応と発症すると考えても安心してられるという反応間は、主に弱い負の関連がみられ、ネガティブな反応が強いほど、安心してられなかった。

また、ネガティブな反応と発症を考えないようにしていることには弱い正の関連がみられ、ネガティブな反応が強いほど、発症を考えないようにしていた。

表1 自分が認知症を発症すると考えたときの反応項目間の相関係数

	恐怖	不安	脅威	諦め	懸念	発症を考えない ようにしている	安心して いられる
恐怖	1	.818**	.752**	.374**	.655**	.206**	-.145**
不安		1	.789**	.389**	.659**	.208**	-.153**
脅威			1	.365**	.542**	.200**	-.141**
諦め				1	.333**	.368**	.101*
懸念					1	.171**	-.096*
発症を考えない ようにしている						1	.177**
安心して いられる							1

Spearman相関係数

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

③ 認知症発症についての心配に関連する要因

自分が認知症を発症することについて、「おおいに心配している」と回答した者の割合 135 名 (24.5%)と「多少心配している」「あまり心配していない」「まったく心配していない」と回答した者 416 名 (75.5%)に 2 分類 (おおいに心配している群、心配していない群) し、関連する要因

を検討した。

対象の居住地、年齢、性別と自己の認知症発症についての心配の有無との間には、統計学的に有意な関連はみられなかった。一方、認知症発症についておおいに心配している群において、自分の健康に関して不安のある者は84名(66.1%)、心配していない群においては166名(42.2%)であり、認知症発症についての心配と健康不安の有無には、統計学的に有意な関連がみられた( $p < 0.001$ )。

Japanese-language Dementia Knowledge Assessment Scale : DKAS-J を用いて測定した認知症についての知識について、おおいに心配している群の平均得点と標準偏差は  $16.7 \pm 8.2$  点、心配していない群では  $15.7 \pm 7.8$  点であり、有意な差はみられなかった。ベック抑うつ質問票 BDI-II を用いて測定した抑うつについて、おおいに心配している群の平均得点と標準偏差は  $12.4 \pm 8.1$  点、心配していない群では  $8.8 \pm 6.8$  点であり、有意な差がみられた。

今後は、自己の認知症発症の心配について、年齢、性別、居住地別の解析や多変量解析等の詳細な分析を行い、地域に住む中高年者に対する支援を検討していく。

#### (引用文献)

- 1) 内閣府, 認知症に関する世論調査(2015年), (アクセス: 2023年5月8日)  
<https://survey.gov-online.go.jp/hutai/r01/r01-ninchishog.pdf>
- 2) 久木原博子, 内山久美, 他, 高齢者における「認知症」に関するイメージと知識, 看護学統合研究, 13, 16-21, 2011
- 3) 新里和弘, 病気不安症(従来の心気障害), 精神科治療学, 32, 1015-1019, 2017
- 4) Eva-Marie K, Catherine E B, et al. Dementia worry: a psychological examination of an unexplored phenomenon, Eur J Ageing, 9, 275-284, 2012  
<https://doi.org/10.1007/s10433-012-0242-8>
- 5) Adrianna K, Julie A S. Dementia worry and its relationship to dementia exposure, psychological factors, and subjective memory concerns, Appl Neuropsychol Adult, 23, 196-204, 2016  
<https://doi.org/10.1080/23279095.2015.1030669>
- 6) Joie M, Molly M. The impact of aging stereotypes on dementia worry, Eur J Ageing, 14, 29-37, 2016  
<https://doi.org/10.1007/s10433-016-0378-z>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中山綾子, 宇佐美利佳, 佐伯香織, 古川直美, 川畑美果, 滝川満理奈, 星野純子	4. 巻 42
2. 論文標題 地域に在住する中高年者が自己の認知症発症に抱く感情	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護科学学会誌	6. 最初と最後の頁 356-364
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.42.356	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山綾子, 星野純子, 古川直美, 宇佐美利佳, 川畑美果
2. 発表標題 地域に在住する中高年者が持つ認知症に関する知識および認知症発症に関する感情
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域住民の自己の認知症発症に対する感情に関する研究についてのWebページの製作 <a href="https://chiiki-zaitaku-kangogaku.jimdofree.com/">https://chiiki-zaitaku-kangogaku.jimdofree.com/</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西谷 直子  (Nishitani Naoko)  (10587009)	名古屋大学・医学系研究科 (保健)・教授    (13901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古川 直美  (Furukawa Naomi)  (40290035)	岐阜県立看護大学・看護学部・教授（移行）    (23702)	
研究分担者	宇佐美 利佳  (Usami Rika)  (10516850)	岐阜県立看護大学・看護学部・講師（移行）    (23702)	
研究分担者	佐伯 香織  (Saeki Kaori)  (10378226)	名古屋大学・医学系研究科（保健）・助教    (13901)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中山 綾子  (Nakayama Ayako)		
研究協力者	川畑 美果  (Kawabata Mika)		
研究協力者	滝川 満理奈  (Takikawa Marina)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------